夏の日差しから逃げるようにして入ってきた客で、店内は混みあっていた。角の席で一人の淑女が静かに本を読んでいた。ラージサイズのアイスコーヒーを持った男が彼女の前に座った。
淑女は一瞥して言った。
「あら、何も言わずに座るの？」
「これは申しわけない、素敵なお姉さん。相席いいかな？ 他の席がなかなか気に入らなくてね」
「――『気に入らない』？」
本から顔を上げて問うた。男は余裕ありげな表情で言葉を返した。
「ああ。あなたのような美人の隣の席が空いていればそう感じるのは当然だと思うよ」
淑女の目に興味が灯る。何もせずとも消えそうな。
「初めて聞く口説き文句だわ。そうやって口説いてきたのはあなたが初めてね」
「はは、それは嬉しいな」
「でも、なんでもいいわ」
やはり消える。彼女は再び本に目を落とした。
男は肩を落としかけたが、彼には彼女の読む本にかなりの見覚えがあった。
「それ、『アンドルー・ガーヴ』？」
「え、ええ、そうよ。……知ってるの？」
「『諜報作戦／D13峰登頂』は何度も、それ以外も一通り読んでるよ。おもしろいよね」
淑女は年齢相応の表情になった。今度は勢いよく男への興味が着火した。本は閉じられた。
「意外」
「本を読んでるのが？」
「そう」
「僕が呼んだのは和訳じゃなくて原書だったんだ、っていうのも意外？」
「……それは自慢臭いわね」
「えっ、あっと……」
「あはは、案外手慣れてないのかしら？」
冗談交じりの質問だった。男が白状するために口を開いたのは彼女にとって想定外だった。
「……じつは」
「……『じつは』？」
美人の顔にイタズラ好きのこどものような無邪気な笑みが浮かぶ。
「女性に声をかけたのなんて今回が初めてですよ」
「へえ。そうは見えなかったけど？」
「それだけ必死だっただけですよ。あなたの隣に座るためにならなんでもない」
「その口説き文句はとてもすきね」
いつの間にかアンデレス・ロイ・シュバルツ＝マイヤーは前のめりになっていた。